

中世における騎士という存在

——人々の「理想」としてのアーサー王——

草 地 伸 圭

中世における騎士という存在 ～人々の「理想」としてのアーサー王～

The Knight in the Middle Age —King Arthur as the ideal person for people—

草 地 伸 圭

序論

中世と呼ばれる時代は、ヨーロッパにとって変化の時代であった。今日、ヨーロッパにおける中世とは一般に10世紀から16世紀までのことを指す。すなわちゲルマン民族の大移動が終着し定住化が進み、キリスト教の定着に伴う封建社会の成立から始まり、王権が強化され絶対王政が成立し、封建制度が崩壊するまでを中世としている。この中世という時代に成立し、力をつけていった一つの階級がある。「騎士」という存在である。

騎士とはいかなるものか。ウインターやブムケラによると、中世初期において騎士を指す言葉として使われていたラテン語のミーレス (miles) は、元々は「戦士・兵士」を指す言葉であった (ウインター、33)。このことから考えるに、騎士とは単なる「馬に乗って戦う兵士」を指していたと思われる。ところが今日の英語において「騎士」を表すナイト (knight) と「馬に乗って戦う兵士」を表す語は異なっており、単なる騎兵はキャヴァリアー (cavalier) とあらわされている。このように、騎士という言葉の定義は時代の変化によって変わっていった。いくつかの文献から読み取れる中世における騎士の定義とは、「重武装を装備して馬に乗って戦う重装騎兵」であり、理念として「主君に対して忠誠を誓う」、「弱者と婦人、キリスト教に対する奉仕

の心を持つ」存在であるとされる。ポニゾーというイタリア人司教によると、ミーリテース (milites、ミーレスの複数形でここでは騎士を指す) は、主君、特に国家の支配者といった世俗の権力に従い、キリスト教を信仰し、主君に忠誠を誓い誠実に使え、主君の敵、および異端の人間とは命を賭して戦い、貧しいものや女性、子供を守る、ということがミーリテースの義務であると語っている (ウインター、68-69)。この彼の文章が、端的にこの時代の騎士の精神について表しており、騎士とは高潔な精神を持つ理想的な人物であるという印象を受ける。

このように騎士とは本来のただの兵士を表す語から、次第にある種の信念を体現する高潔な人物を表す語となっていく。このような変化に伴い、いつしか騎士という言葉は名譽的な称号へと変化していったのである。

このような変化を体現するものとして「アーサー王伝説」がある。英雄アーサー王と、彼に従う円卓の騎士たちの物語は、イギリスでは子供から大人まで広く知られている物語である。その中で、彼らはまさしく理想の騎士として描かれている。

ところが、現実の騎士とは必ずしもこのような理想的な人物たちではなかったようである。騎士というものはもともと《馬に乗って戦う兵士》を指す言葉であり、それが中世に入り、封建社会が形成されてゆく中で、名譽

的な称号という段階を経て《階級》へと進化を遂げたのである。その過程で《騎士という身分の確立》《キリスト教的側面の獲得》《宮廷における貴婦人とのかわり》など、さまざまな変化をしたが、元々は正義の心や慈愛といった精神を持つ必要がないただの軍人であった。そのことは騎士が名誉的称号、階級へと変化しても変わることはなく、騎士となるのに人格が考慮されることはなかった。我々が持つ騎士のイメージは、中世における騎士の《目標》であり、騎士たる《必然》ではなかったのだ。古来より軍隊による侵攻の際には略奪や暴行がつきものであったが、前述したように騎士もまた軍であることには変わりなく、騎士による略奪や暴行が行われることも少なくはなかった。これが中世の騎士の実情である。

また、アーサー王についてであるが、本来彼は王ではなかったようである。その根拠としては、ジョン＝マシューズが著書で「アーサー王物語とは、6世紀のアーサーという名の指揮官を軸に、古代神話に登場する、同名または似た名前の英雄を組み入れた結果として生まれたものだというのが、ほぼ確実視されている」（マシューズ、13）と述べているように、本来は軍隊の一指揮官であったようであるという説がある。彼はそもそも王ではなかったのである。アーサーは古代の人々により神話的、英雄的な力を得て、《王》としてのちの時代に伝わった。そして、中世に書かれた物語の中で、「吟遊詩人はアーサーがもっとも高貴で、優れた王であることを声高らかに歌い、詩人はアーサーに最高の賛辞をおくり、それは何時までも伝えられるといった」（マシューズ、11）といわれるほどの人物となったのである。

なぜこのような変化が起こったのか。本論では、アーサー王物語が、歴史書に記されていた現実の物語と、中世における騎士道文学作品としてのアーサー王伝説の大きな相違点

である《騎士という要素の追加》《キリスト教的価値観の追加》《宮廷風な恋愛の追加》の3つの視点から当時の時代背景や文化を考察し、この疑問に対する回答を得たい。

1. 騎士の成り立ちとその実情

1-1 アーサー王物語の成り立ち

騎士の成り立ちを語る前に、アーサー王物語の成り立ちについてここで記しておく。聖ギルダスの『ブリタニア衰亡記』など、いくつかの歴史書によると、アーサーなる人物は6世紀ごろに存在したとされる。書物が語るところによれば、アーサーはブリトン人の優秀な指揮官であり、侵攻してきたサクソン人をはじめとする侵略者たちと戦い、当時混乱状態にあったブリテンの中で対立しあっていた異なる民族を結集させ、勝利を収めたとされる（マシューズ、43-44）。この事実が口伝によって語り継がれる中で、ブリテンに存在したケルトの神話や英雄、またその他の地方における物語と融合して、神話的な要素を持つ物語として語り継がれた。その物語が12世紀初頭、ジェフリー・オブ・モンマスという人物によって『ブリテン列王史』という本にまとめられる。この本に語られるアーサーの物語を、吟遊詩人たちが大陸に持ち込み各国に伝えると、たちまちヨーロッパでアーサー王物語は人気となった。そして吟遊詩人たちによって詠われ、騎士道物語を書く者にとって人気の題材となったアーサー王物語は、各国にもともと存在した英雄譚をも取り込んでいくこととなり、「以前から人気のあった各地の騎士物語についても、彼らがアーサーに仕える騎士だとされるようになったのである」（佐藤、361）。その理由は、《円卓》という概念によるところが大きいであろう。先に述べたとおり、アーサーは異民族を結集させ外敵に立ち向かった。そのことを象徴するものとしていつからか追加されたのが円卓という

概念であり、この円卓にはアーサーに忠誠を誓う騎士ならば誰でも座ることができ、円卓においてすべての騎士の立場は対等であった。このような概念を持っていたことから、異なる国の騎士であっても物語に組み込みやすかったのであろう。こうして、アーサー王物語はイギリスだけでなく、他の国の英雄をも《円卓の騎士》として取り込んでいったのである。たとえばフランス人の詩人クレアティン・ド・トロワによる『ランスロまたは荷車の騎士』によってランスロットが、ドイツの詩人ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクによる『トリスタン』によってトリスタンが、それぞれ円卓の騎士となっている。これらの騎士の元となる要素は元々のアーサー王物語の中にあったものと、各国の土着の物語が混合されたものとされている。これらの物語は15世紀末、サー・トマス・マロリーによって『アーサー王の死』という1つの本にまとめられた。これがアーサー王物語の1つの完成形である。

さて、このような成り立ちを持つアーサー王物語であるからして、この物語における騎士たちについて考えるときに、当時のイギリスの状態のみを情報源とするのは充分ではないであろう。発展の過程で様々な国、特にドイツとフランスの要素を吸収しているので、アーサー王について考察する時には、イギリスのみならずドイツ・フランスの状況、ひいてはヨーロッパ全体の状況を考慮する必要があるであろう。

1-2 騎士の誕生

中世という時代、特に10世紀のヨーロッパは、極めて危険な世界であった。バイキングやマジャール人が進行し、それに対抗すべき貴族たちは身内同士で争っているというありさまであり、「たんに生きのびることでさえ絶え間ない苦勞であり、心配の種である」(ル・ゴフ、87)といった時代であった。こ

のような時代の中、人々の社会における役割はおのずと3つの役割に分けられた。《祈る人》《戦う人》そして《働く人》である。「それ以来、祈りと戦いと野良仕事は、それぞれ品格の差はあっても、市民生活の基本的な三面、つまりキリスト教世界の三柱とみなされた」(ル・ゴフ、88)と言われ、すなわちそれまでは争いを否定していたキリスト教が、平和を求める戦いを神聖なものともみなしたということである。全ての成人男子が兵士たりえた時代から、戦うことを専門にする人々が生まれる下地は、まさしく時代と宗教によってつくられていたのである。

それに加え、戦争の方法の変化もひとつの原因である。戦場における主力が重装騎兵、すなわち重い甲冑を着こみ、馬に乗る兵士が主力となっていくにつれ、攻撃用・防御用の装備の値段は高騰し、必然的に金をもっている者のみが、あるいはその下についている者だけが高価な装備を手に入れることができるようになってきた。こうなってくると富裕層のみが武器を購入し、また部下にそれを与えることができるようになってくる、その結果として、軍職は専門的なものにならざるを得なくなる。こうして《戦う人》たる騎士という階級が成立したのである。

このような事情に加え、さらにヨーロッパ社会で封建制が成立していったというのも原因の1つであろう。封建制とは、「広義には農奴制を基礎とする中世の社会制度全般をさし、狭義には、封土を媒介として結ばれた主君と家臣間の保護、軍役奉仕の双務的關係を意味する、中世社会の法制・政治制度」(世界史辞典、680)であり、これは騎士の基本要素である奉仕の精神を形作るものであるばかりでなく、前述したとおり、騎士となるにはなによりも武器と馬が必要であり、そのためには資金が必要であるから、騎士となれるのは貴族か裕福な人物のみということになる。さらに多くの国において封、すなわち領土と

いうものは世襲され受け継がれていくものであるから、最初はあるていど自由に騎士になれた、つまり生まれはどうあれ能力を持つものは騎士になることができた時代から、しだいに騎士階級とでも言うべきものが形成されていく時代となり、貴族かそれに連なる者、あるいは騎士を世襲する者のみが騎士を名乗れる時代となってゆき、ついには貴族＝騎士となるようになる。ここに階級としての騎士は完成されたといえよう。フランスにおいては、13世紀にはすでに、祖父や父が騎士ではないものは騎士になることができなかつたとされる。

1-3 騎士の発展と騎士道文学の誕生

このような変化に伴って貴族が騎士となってきたのは、国々によって多少のばらつきはあれ、13世紀ごろとされる。そして13世紀こそは、騎士道文学が最も流行した時期である。1099年の第1回十字軍の成功により騎士には名誉と褒章が与えられ、騎士へのあこがれは高まった。それらの勇名を歌った叙事詩が宮廷で歌われるようになった。そこから騎士の武勇伝に対する需要は高まり、騎士道文学は発展したといえるであろう。アーサー王物語は題材として大変好まれ多くの詩人たちによって詠われ、ヨーロッパじゅうに広まっていったのである。

この時代に誕生したと思われる騎士道文学の題材として好まれた円卓の騎士と云えば、サー・ランスロットであろう。

『ランスロまたは荷車の騎士』で初登場したランスロットは円卓の騎士の中でも最も有名な騎士と言われている。湖の妖精に育てられ、騎士道精神と武術を学んだため《湖の騎士》と称される。彼は決して天才的な剣士ではなかったが、常に高みを目指し続けるあくなき向上心と、血のにじむような努力で円卓の騎士の中でも最強とされる腕前を手に入れた努力家である。また、名声や身分にも無頓

着であり、戦いとは自らを高めるためのものと考えていた。そのため、名誉のかかった試合で引き分けに終わったとき、相手に勝ちを譲ったことさえある。困っている人や仲間を見捨てることは決してせず、仲間の名誉を護るために自分の名誉を犠牲にすることができる男であった。どこまでも騎士道精神の体現者であることを望み、理想を追い求め努力する人間であった。そんな彼は騎士道文学の題材としても好まれ、多くのエピソードが生まれている。

1-4 騎士の衰退と現実

ところが現実の騎士は、物語のランスロットと同じようなものではなかった。ヨアヒム・ブムケはこの時代について、中世社会の現実にはロマンチックなものではなく、資料がほとんど語ることのない一般庶民の生活が、貧しさと過酷な圧政に満ちていたことは言うまでもないが、富者、貴人の日常生活ですら、快適と呼ぶには程遠いものであり、暗く不潔な城に粗野な料理、そして女性の誇りを無視した屈辱的な性関係、これらこそが現実であった。と語っている。さらには資料が明らかにするところによると、貴族の公的な面としては、支配という者が弱者に対する迫害であり、賄賂は横行し、正義はより多くを支払いうる者の側に、あるいは法廷における決闘で脅力をもって勝利した者の側にあった。戦争では騎士の鍛えられた武術など役に立たず、放火や略奪がふつうの方法であったとも語っている（ブムケ、14）。

このように中世とはきらびやかな生活が存在していたとは言い難いものであったようだ。また、騎士が実戦で活躍する機会というのも減ってきていた。イングランドの場合、12世紀ごろには軍役の代わりに、1ポンドの軍役代納金を支払うことで軍役を免除される事が出来た。貴族の長男など死ぬわけにはいかない人々は、金を支払って戦場へ出ることを拒

んだのである。また、国としても1ポンド(240ペンス)の金で優秀な傭兵騎士を1人6ペンスで40日間雇うことができた。このため戦争の主演は傭兵騎士となり、傭兵の行動は騎士道精神にのっっているとは言い難いものであった。傭兵団がクリュニー修道院のそばを通った時の様子を、当時の修道院長はこう記している。

まったくひどいペストが当地に発生しております。人数はわずかに四百に満たないのに、何しろ野蛮なために非常に凶暴な、人間というよりはむしろ野獣といふべき者たちが、つい最近、皇帝の領土から我々の領地に入ってきました。これには誰も抵抗しませんでした。彼らはどんな人間でも容赦せず、性別、年齢、社会的地位を一切考慮せず、教会や城塞や村々を襲ったのです。あのような小集団でかくも数多くの恥知らずな行為を重ねたのですから、これが大集団でしたら、いかばかりの不法を行うことでしょうか。(ウインター、74)

このように現実の騎士とは必ずしも理想的ではなかったようである。このことをヨアヒム・ブムケは次のように述べている。

当時の現実がかかる暗黒を呈していたのとは裏腹に、文芸作品の中で宮廷詩人の描く社会像には、生活を辛酸で陰鬱にしていたような事柄は何ひとつ顔を出さない。経済的・社会的圧迫や政治紛争などはそこからことごとく締め出されており、人々はもっぱら倫理と社会の完成を求め励んでいる。極端に非現実的なこのような社会像は、明らかに現実とは正反対のものとして構想されたのであり、現実とは正反対のものとして解釈されなければならぬのである。(ブムケ、16)

このように物語の騎士は現実の騎士とはかけ離れていたようであり、騎士道文学とはまさしく《理想の》騎士たちの物語であり、現実の騎士の行動は、物語ほど綺麗ではなかったということである。

2. 中世キリスト教とアーサー王伝説のかかわり

2-1 中世におけるキリスト教という存在

中世ヨーロッパ社会において、ほぼすべての要素は、キリスト教と何らかのかかわりを持っているといえるだろう。「組織された社会全体と教会が一体化していた事実は、歴史の中で中世を先行する時代、また続く時代から分ける基本的特徴である。最大限に範囲をとるなら、教会と社会の一体化は4世紀から18世紀、つまりコンスタンティヌスからヴォルテルにいたるヨーロッパ史の特徴である」(サザーン、6)と言われるほどに、中世の社会とキリスト教というのは密接なかかわりを持っていたのである。中世においては、キリスト教以外の宗教に属する者、いわばアウトサイダーは、最悪の場合、生きることすら許されず、良くても極めて限定された権利しか与えられなかったのである。この良いほうに属するアウトサイダーというのはたとえばユダヤ人のことである。彼らは自分たちの宗教を広めようとさえしなければ独自の宗教を持つことを許されたし、ユダヤ人だからという理由だけで殺されるようなことはなかった。しかしあくまでこれは最低限のものであった。サザーンの著書によれば、中世の著名な神学者、トマス・アクィナスは(不信心の)罪により彼らは、永遠に隷属的地位にあり、彼らの財産は為政者が処分してよい。ただ、為政者は、彼らから生活手段を奪ってしまうほど多くは取り上げるべきではないと述べている(サザーン、7)。さらに彼は、ユダヤ教以外の異端、アウトサイダーについて、「異端

は破門のみならず、死に値する罪である。なぜなら、魂の声明である信仰を朽ちさせることは、世俗の生活をつかさどる貨幣の贖物を作るより悪いことだからである。贖金造りが公益にとっての敵として君主によって正当に殺害されるように、異端者も同じ罰に値する」(サザーン、7)と述べ、このことから中世における教会の立場というものが読み取れると思われる。そして、中世においてはほぼすべての人は生まれてすぐ洗礼によって教会の一員となっていたのである。それは国の長である国王すらも例外ではなく、国王と教皇はほとんどの場合協力関係にあり、国王を神の代理人として統治の権利を与えられたものとする見方が主流であった。中世においては、教会とは一種の国家のようなものであり、その国の中の州として実際の国々があったといっても過言ではないほどの影響力を持っていた。教会がこのような強固な影響を持つようになった背景としては、社会的混乱にその要因があるといえる。ローマ帝国の崩壊に伴いゲルマン人がヨーロッパ大陸を暴れまわる大混乱が起こったこと、それが落ち着きつつある頃には、イスラーム勢力やモンゴル人といった東方からの脅威があったこと。いわば中世のヨーロッパとは常に戦争の渦中にあっただといえる。また貴族ですら生活に苦しんでいた時代でもあり、一般の庶民は飢えと貧困に常に苦しめられていた。こういった混乱の中、ヨーロッパ人として団結し、相互協力の元外敵に立ち向かうという姿勢を形作るため、すなわち国という垣根を越え、外敵に対処するためお互いに協力し合うための道具としてもちいられたものこそ、キリスト教という宗教と、その信者団体による教会という機関だったのである。

もともと、原初のキリスト教ではそれがどのような理由・手段であれ争いそのものを非難していた。しかし、戦乱の時代において信徒を確保するためには時代に合わせて変化が

求められたのであろう、いつしか「信仰を護るための戦い」は教会によって正当化されることとなった(ル・ゴフ、92)。これは騎士道精神というものの成立と無関係ではないと思われる。中世において「戦う者」という身分とされた騎士は、もともとは単なる1兵士として領主や王につかえているのみであったが、いつしか宗教を守護するものとしても扱われるようになった。これは先ほど述べたように中世におけるヨーロッパの敵は異教徒がほとんどであったことが、キリスト教の他宗教への排他的側面と合致したからであろう。ともかく、騎士には兵士としての能力以上に、キリスト教的価値観における道徳というものを身につけることが求められたのである。それはたとえば弱者、女性の保護、主とキリスト教への忠誠などであった。

こういった宗教と守護者としての騎士の戦いの代表例としては十字軍があげられる。イスラームによって占領された聖地を解放する聖戦と銘打たれたこの戦いは、当時エルサレムを世界の中心と考えていたキリスト教徒にとって、イエスが生まれそして死んだ地を解放することは尊い責務であるとみなされた。また「10世紀後半にクリュニーの有力な修道院が提唱した神の平和運動とのちの神の不戦運動は、血気にはやる貴族たちの交戦本能を抑えようとするものだった。いまや貴族たちは抑えがたい闘争欲を神聖な行動で発散する機会を得た——境界を代表して教皇が彼らの疑う余地のない人殺しの能力を正当化したのだ」(ハーバー、46)とハーバーが言うように、世俗的な動機とうまく合致したこともあって、数多くの騎士がこの聖戦に参加したのである。

このように中世におけるキリスト教というのは社会全体に置いて極めて大きな影響を与えている存在であり、騎士身分の成立過程においても影響を及ぼしたと思われる。

2-2 聖杯伝説

このようにキリスト教が中世の社会文化に影響を与えていたことは疑いようがなく、それはアーサー王物語などの騎士道文学についてもそうであった。影響は多岐にわたり、たとえばキリスト教的な騎士の十戒を順守し、騎士道精神を体現したようなランスロットという騎士の誕生、また同じように騎士道精神を順守することを何よりも誉とするような騎士がアーサーの円卓の騎士に加えられていったことなどが挙げられる。

しかし、何よりも大きく変化したと思われるのは「聖杯」に関する物語である。もともとの神話としてのアーサー王伝説の時点で、聖杯という概念は存在したとされる。しかしそれは今日語られるようなものとは異なっていた。現在聖杯とは最後の晩餐の際にイエスが持っていた器のことだとされているが、もともとの聖杯とは大釜の様なものであったようである。元々の聖杯にはケルトなどのブリテンにおける土着の宗教や神話の影響がとても強かったようであり、聖杯の効能も尽きることもない御馳走を蓄えておける魔法の杯といった、当時の人々が喜びそうなものであったとされている。

聖杯は、初めてアーサー王伝説がまとめられたものであるモンマスの『ブリタニア列王史』においてもいまだ概念的存在の枠を出なかった。このようなものであった聖杯が変化を遂げたのは1181年、クレアティン・ド・トロワによって描かれた『ペルスヴァル』または『聖杯の物語』という題名がつけられた作品においてであった。この時に、ケルト的なものからキリスト教的なものへと聖杯は変化を遂げたとされる（マシューズ、175）。この新しく表れた聖杯という題材は騎士道物語の作者たちに好まれ、その後の作品に登場する機会も多くなり、それに伴って性質が変化していった。食べ物が出てくる魔法の器から、キリストが最後の晩餐で所持していた杯で、

ゴルゴダの丘にてイエスが処刑された際、その血を蓄えた器であるとされた。すなわち聖遺物の1つとして扱われるようになったのである。

聖杯を手に入れることに成功した騎士は、完璧で、聖人のような人間であった。アーサー王物語の数多くの騎士たちの中でも、パーシヴァル（ペルスヴァル）、ガラハッド、ボールスの3人の騎士のみが聖杯を手にする冒険に成功した騎士である。

特にガラハッドという騎士が、もっとも完璧に描かれている騎士である。このガラハッドは、ランスロットの息子である。ランスロットもまた武力と人格を併せ持った騎士道精神の鏡のような人物として数々のアーサー王伝説に関する著作に描かれているが、そんな彼の唯一の欠点が主君アーサーの妻、グヴィネヴィアと不倫関係を結んでしまったことである。その息子ガウェインは、父を超える武力を持ち、人格も高潔であり、さらには父のような不貞を犯すこともない、そもそも厳密にはキリスト教的価値観において好ましくないものとされていた、女性との交わりすら果たすことのない、まさしくキリスト教的価値観において完璧な人物として描かれている。それはガラハッドが以下に引用したような最期を遂げることからわかる。

Then Galahad set the Grail upon the altar and knelt once more in prayer. And as he knelt, his life was accomplished, and his soul taken up to Heaven so that his body lay dead before the altar. Then the sunbeam descended from above, striking clean through the roof of the chapel, and the Bleeding Spear and the Holy Grail passed up and vanished from sight, nor were they ever again seen upon this earth. (Green, 286)

聖杯を手にした際、もはやこの世の人間としては十分すぎるほどの徳を身につけたとして、彼は神の国へと旅立つのである。

これはあたかも、ごく普通の人間を父に持ちながらも、非凡な力を持った完璧な人間であるとされるイエス・キリストを模した存在であるように考えることができるであろう。その最後が「死」ではなく、神の国への旅立ちとされることも類似点ではないだろうか。

この最期こそが、彼が完璧な騎士であることの証明となるであろう。騎士として、神を信仰し、何一つ罪を犯さなかったからこそ、彼は天の国へと行けたのであろう。

このエピソードだけでも、中世キリスト教の価値観がアーサー王伝説の変化・形成に影響を及ぼしていたことがわかるであろう。こういった変化の原因としては、やはり物語が、どのような方法で伝えられたとしても、その相手がキリスト教徒であったことが大きいのではないか。中世ヨーロッパにおいてキリスト教は生活の規範として扱われていた。であるなら、その規範を忠実に守っている英雄のほうが、人々には親しまれやすく、またキリスト教的価値観以外を持っている英雄が人々の人気を集めないようにするための必然的な変化だったのではないだろうか。洗礼を受けた人々は、キリスト教的価値観を生まれながらに、当然のものとして受け入れ成長し、物事の判断基準とする。そんな人たちに好まれるのは、キリスト教的価値観を内包した物語であり、それを求める人たちにこたえるため、アーサー王伝説に聖杯伝説をはじめとするキリスト教的価値観、エピソードが追加されていったのではないだろうか。

3. アーサー王伝説と中世の恋愛

3-1 アーサー王伝説の女性たち

アーサー王伝説とは、確かに存在したとされる1人の軍指揮官アーサーが敵対勢力を撃

退した際の逸話が、口伝による伝承の過程でケルト神話等の土着の物語を吸収し、中世において騎士道文学の題材として取り上げられる際に、キリスト教的要素や騎士という概念、また各地の騎士物語を吸収して出来たものであると言うことはすでに述べたことであるが、この元々のひとりの軍指揮官アーサーの物語に付け加えられた要素として、アーサーやその仲間である円卓の騎士たちに関わる女性たちという要素が挙げられる。円卓の騎士たちの傍らには、何らかの形で女性が関わっている。それは中世において、騎士の義務の一つに、婦人に対する奉仕、というものがあったからなのかもしれない。

そんなアーサー王伝説の女性たちの中でも、ひととき重要な役目を持つのが、アーサーの妻、グヴィネヴィアであろう。グヴィネヴィア、ギネヴィアまたはグヴィネーヴルなどと呼ばれる彼女は、カメリアドの王レオデグランスの娘である。レオデグランスはアーサーが王となり、その即位に反対する勢力と戦っていた時、アーサー側についた諸侯のひとりであり、アーサーに味方したゆえにウェールズの諸侯と戦闘になり、窮地に陥ったところをアーサーに助けられ、その行為に深く感謝し、娘グヴィネヴィアとの婚姻をアーサーに持ちかけた。グヴィネヴィアは大変美しい美貌の持ち主で、アーサーは一目で彼女を気に入り、2人は結婚することとなった。その結婚式の際にレオデグランスから送られたものが、のちにアーサーの騎士たちの象徴となる円卓である。このようにグヴィネヴィアとの婚姻は、アーサー王伝説の1つの転換点であった。

ところが2人の結婚生活は幸せなものではなかった。婚姻当時、グヴィネヴィアは十代前半の少女であった。そのような幼い少女が夢見るような結婚生活は、彼女には用意されていなかった。アーサーは王であり、たびたび戦争に出かけていかなければならなかった。

若い身ながらも王宮では王妃としてふるまわねばならず、王妃としてではない素の自分を見せられる相手であるはずのアーサーは戦争で王宮を留守にすることが多く、彼女は深い孤独に悩まされた。そんな彼女の孤独を癒してくれたくれる人物が現れた。円卓の騎士の中でも随一の実力と、騎士道精神を体現するといわれた精神の持ち主、《第一の騎士》ランスロット卿である。ランスロットは、なにごとにも理想を求め続ける理想主義な男であった。それは恋愛においても同じであった。それゆえに主君であり親友であるアーサーの妻こそ、騎士道精神に則った《貴婦人への奉仕》を捧げるにふさわしい相手だと思ってしまったのである。主君の妻と結ばれることなど、彼にとってはありえないことであり、永遠に理想的な愛を求め続けることができるからである。ところがグヴィネヴィアのほうは、そのような高尚な愛ではなく、ごく普通の男と女としての愛をランスロットに求めるようになってゆく。そんなすれ違いの日々が続き、悩み苦しんだランスロットは、ついに理想の愛を捨て、ごく普通の愛をささげる相手としてグヴィネヴィアを見るようになってしまう。かくして2人の関係は徐々に周りにも知れるようになってゆき、主君の妻と不貞を働いているのではという疑いが、ランスロットと他の円卓の騎士との不和を招いてしまう。そんな隙について、アーサーを恨む者によって2人の関係が完全に晒されてしまったのである。当時の法律では女性の姦通は死刑に値するものであったため、すぐにグヴィネヴィアは処刑されることになってしまう。その時にはもはやグヴィネヴィア以外何も見えなくなっていたランスロットは、処刑の場に割り込み、ランスロットと並ぶ強者とされるガウェインの弟であり、ランスロットを慕っていた騎士、ガレスを殺してしまう。このことがきっかけでランスロット派とガウェイン派に円卓の騎士たちの勢力は二分され、その隙を突いたモ

ルドレッドの手によって、アーサーは死んでしまう。そのことによって騎士としてのランスロットは死に、その場を離れ何処かへ旅立っていった。そうしてこの決定的な対立を生んだのが自分であると悟ったグヴィネヴィアは、尼僧となって残りの人生を過ごしたのである。これがアーサー王物語の顛末である。

3-2 中世における結婚

さて、上記のグヴィネヴィアの物語からは、結婚によって幸せになれなかった女の情念が、決定的な悲劇を引き起こしてしまったという物語である。では、この物語が描かれた中世における結婚とは、どのようなものであったのだろうか。ル・ゴフは著書においてこう語る。

中世において、婚姻は何よりもまず「和平」を表す。一族と一族の間の対立関係やときには紛争の果てに、婚姻が和平を制定し、調印させる。和睦する相手の家へ娘を嫁がせるのは、協定の中心に嫁を置くことになる。この和合の担保と手段には女性の個人的運命や私的な願望を越えた役割が与えられる。(ル・ゴフ、334)

このように、中世においての結婚とは、第一にある一族と別の一族とを結びつけるためのものであったようだ。そのため、家庭における女性の役割とは、「女性は両家族のあいだの一切の不都合を解消し、嫁ぎ先の家計を維持するために子供を生み、体と持参金を完全に提供する、つまりそれがおそらく夫への義務以上に強く女性に影響される」(ル・ゴフ、334)とル・ゴフが述べているように、女性の役割とはまず子供を生むことであり、さらに言えば、婚姻の際の持参金によって、夫の一族を助けることであるといえよう。ル・ゴフによれば当時の騎士、貴族たちにとっては、息子に自分たちの身分より高い身分の嫁

を見つけてやるのが一般的であり、しばしば女性は結婚によって自分より低い身分の男の妻となり、そのうえ夫への服従を求められた（ル・ゴ、334）ということであるから、中世において女性の婚姻というものは、一族同士の結びつきを強め、多くの場合は男性の地位向上のために利用されるものであったといえよう。

このような現象を生み出した背景には、キリスト教的な価値観がある。聖書には、「そちらから書いてよこしたことについて言えば、男は女に触れないほうがよい」（コリント人への手紙、7：1）「独身の男は、どうすれば主に喜ばれるかと、主のことに心を遣いますが、結婚している男は、どうすれば妻に喜ばれるかと、世の事に心を遣い、心が二つに分かれてしまいます」（コリント人への手紙7：33-34）といったように、中世において絶大な影響力を持っていたキリスト教は、結婚そのものについて、主を想うことよりも重要だとは思っておらず、むしろ女性が悪であるかのような扱いをしており、結婚の目的はただ子供を作るためであると力説した。このように、中世において、女性は、恋愛においてはまったく自由ではなく、ただ親に言われた相手と結婚し、よき妻、母であることを強制されていたのである。こういった事情を反映していると思われるエピソードが、アーサー王伝説の中にある。それはアーサーの甥であり、ランスロットと並ぶ円卓の騎士の代表的な人物であるガウェイン卿の物語である。佐藤俊之の『アーサー王』に描かれているエピソードによれば、ある時、アーサーは女性が最も望むものは何かという問いを与えられ、その答えをラグネルという醜い女に教えてもらう代わりに、彼女の夫を探すと約束した。ラグネルは醜く器量がよいとは言えなかったため、部下の騎士に紹介することをためらっていると、ガウェインがその様子を見て、彼女の夫となることを望んだ。醜い女を妻としたガウェ

インを周りの騎士たちは蔑んだが、ガウェインは「年上の女性は分別があるし、醜ければ浮気の心配もない。それに本当の美しさは美貌ではなく内面だと考えた」（佐藤、146）ため、その蔑みに耐えることができた。ところが結婚式を終え、二人きりになると、ラグネルは美しい女性へと変わっていた。彼女は呪いによって姿を変えられており、ガウェインの献身がその呪いを解いたのである。ところが彼女は自分が美しい姿でいられるのは昼か夜のどちらかだけであり、どちらかを選ぶようガウェインに頼んだ。ガウェインは悩んだ末、どちらかを選ぶ権利をラグネルにゆだねた。それこそが彼女の望んでいた答えであり、その答えにより呪いはすべて解け、彼女は常に美しい姿でいることができるようになった（佐藤、146）。佐藤が「それこそアーサーに問いかけられた『女性が最も望むものは何か』という問いの答えだったのである。女性が望むものは『自分の意思で生きること』だったのだ」（佐藤、146）というように、このエピソードが示すものは、当時の女性にとって自らの意思で生きることが強い望みであったのだろうということである。そして、それはおそらく愛にあってもそうであった。愛を強制される結婚よりも、自発的な愛を望んだのではないだろうか。その根拠として、この中世という時代に生まれ、文学作品にも取り上げられた、宮廷風恋愛というものを取り上げたい。

3-3 宮廷風恋愛

宮廷風恋愛とは、中世ヨーロッパの騎士道精神に基づく恋愛である。それはマシューズによれば「アーサー王文学がその栄光のピークを迎えようとする中世の時代、恋愛は崇拝の概念に近い『宮廷風恋愛』と表現された。宗教的な色づけをした物語の中で、すべての女性は女神として扱われた」（マシューズ、156）というものであり、その愛は騎士から

貴婦人への、献身的な愛を示していた。マシューズはまた、トマス・マロリーが宮廷風恋愛について語った言葉を引用し、この愛について説明している。曰く、

…冬の身を切るような風がいつも緑の夏を壊し傷つけるように、男女の愛もまた変わりやすい。人の心に不易は望み難く、冬の一陣の風のため、ささいなことで貴重なるべき真の愛の傷つき壊れるを見ることもまれではない。…しかし昔の愛はそうではなかった。男も女も7年間愛し合ったし、…その頃は愛は真実であり、誠実であった。そしてアーサー王の時代の愛もそうであった。(マシューズ、156-158)

と、アーサー王時代の愛というものがいかに強固であるかと語っており、またカペルラヌスの「恋とは異性の美しさを目にして、それについて過度に思うことから生まれる一種生涯の苦悩である。この苦悩のままに、恋する者は互いに何よりも相手の抱擁を望み、共通した欲望によって互いの抱擁のなかで愛の掬すべてを実践したいと切願する。」(カペルラヌス『宮廷風恋愛の技術』野島秀勝訳より引用)(マシューズ、158)という文章を用いて、いかに宮廷風恋愛というものが強い愛であるかということを語っている。

宮廷風恋愛については、ブムケが、フランスのフランス文学者のガストン・パリスが挙げた宮廷風恋愛の4つの特徴を記している。それによると宮廷風恋愛とは

一 宮廷風恋愛は、法によって是認されない。ゆえにひそかに営まれることを余儀なくされる。これには完全な肉体的合一も含まれる。

二 宮廷風恋愛は、男性の従属という形

で実現され、男性は自身を彼の奉仕する婦人の僕と考へて、主である婦人の望みをかなえることを心がける。

三 宮廷風恋愛は、より良き存在、より完璧な存在となるべく男性が精進することを求める。男性が己の使える婦人に一層ふさわしきものとならんがためである。

四 宮廷風恋愛は、愛し合う者が会得しておくべき独自のルール、独自の掬を持った一つの芸術であり、一つの学問であり、一つの道徳である。(ブムケ、470)

というものであり、ここからは宮廷風恋愛が当時の法に反するものであり、男性の奉仕精神が重要であるとしている。またブムケは「宮廷風恋愛は一つの社会的価値であって、この価値は宮廷的な徳を實踐し、宮廷的な社交形式を尊重することで實現されたのである。宮廷風恋愛は宮廷的に完璧であることを志す人の恋愛であった」(ブムケ、490)とこの愛が宮廷においては徳とされていたことを示し、暗に宮廷においてはキリスト教的なものよりもこういった価値観が流行していたことを示している。ところが現実には、もちろん婚姻において自分の都合を優先するわけにはいかないので、宮廷風恋愛とは、婚姻の枠外によってのみ成立し、姦通の性格を有していたとブムケは語る(ブムケ、493)。つまり宮廷風恋愛は、通常罪とされる姦淫、浮気によってのみ実行され、一族の都合により結婚はするが、その結婚相手に対してではなくそれ以外の相手にのみこのような愛が實踐されうるのである。そのことは『わが災厄の記』という書籍においてアベラールが恋人であるエロイズに子が生まれたにもかかわらず、妻となることを拒んだエピソードにも表れているとブムケは語る。エロイズは妻ではなく恋人であることで、結婚という強制ではなく愛のみに

よって二人は結びつくことができるから、その方が好ましいというのである。(ブムケ、495) このエピソードには結婚よりも姦通による愛こそが強いのだと考えられていることが示されているであろう。ブムケは次のように語っている。

宮廷風恋愛は一つの社会的ユートピアであった。愛は、新しい、より善い社会、すなわちどこにも存在せず、現実界には存在しえない社会、詩人の文芸的構図の中にしか存在しない社会を表すキーワードであった。このような愛の世界を現実から隔てるものは、すべての悪、すべての不作法が愛の続べるところでは排除されるはずであるというユートピア的仮定であった(中略)そのような理想像は社会的責任という戒律に縛られまいとしたわずかな貴族上層階級の願望を反映している。(ブムケ、492)

このように、法的には許されない行為でありながら、宮廷風恋愛を人々が求め、それを文学作品のなかにも求めていたことは明らかであろう。それはたとえば、アーサー王伝説におけるランスロットとグヴィネヴィアの恋愛である。

Now from the very first day when he came to court Launcelot had loved Queen Guinevere and her alone of all ladies in the world. Faithfully and truly he served her for many years as a knight should, and King Arthur felt no jealousy, for he trusted the high honour of both Launcelot and the Queen. And for a long time Launcelot served Guinevere as a true knight and true subject, seeking only to bring her honour by his mighty deeds. But in the long years of peace when he

was so seldom called away from Camelot on a quest, and when King Arthur needed no longer to lead his hosts forth to battle, both Launcelot and Guinevere began to spend more and more of their time together—more and more often without King Arthur's knowledge.(Green,216)

上記に引用した部分から読み取れるのはまさしく宮廷風恋愛であり、ランスロットが騎士としての愛情を持ってグヴィネヴィアに接し、のちに男女の情愛へと変わり、姦通の性質を有すること、こういった記述が存在したことから、文学作品に宮廷風恋愛が影響していたのであるといえるのである。

3-4 理想と現実

しかし、文学作品は必ずしも理想のみを写していたとは限らないようである。なぜならこのような愛に生きた結果、ランスロットは主君を裏切ったことを後悔し、アーサーの死後、グヴィネヴィアと二度と会うことなく、何処かへ去ってゆくのだから。グヴィネヴィアもまた、俗世を捨て、尼僧となって余生を過ごすのである。

また、アーサーの死の原因も、姦通であるといえる。アーサーは、グヴィネヴィアと婚姻を結んだ後、彼を憎んでいる異父姉モルゴースと一夜を共に過ごしてしまう。それは一説によればモルゴースが魔法でグヴィネヴィアに化けていたからだ、とされるが、とにかくその不貞行為の結果モルゴースが生んだ息子、モルドレッドによって、アーサーはその生涯を閉じるのである。モルゴースがアーサーを憎んでいる理由が、アーサーの父ウーサー・ペンドラゴンが、モルゴースの母イグレーンを父であるゴルゴイスから奪って妻としたことであること、であることを考えると、不貞により確かに一時は大きな満足を得たとしても、最後にはその報いを受けるということ

語っているようにも思える。

デュビーが「文学生産の主流は、肉体の愛であれ心の愛であれ、愛というものが結婚において成就するということを、ますます力説して教えるようになっていったのではないだろうか。そして結婚という合法的な子孫生産は、不実な妻たち、情熱に溺れるあまり子孫繁栄に尽くすことのできないグニエーヴルたちには禁じられるのであった」(デュビー、366)と語っているように、確かにグヴィネヴィアは誰の子も産むことはなく、それこそ中世の価値観においては「妻の質の善し悪しはまず子供を生む能力で判定され、女性の不妊は離婚原因の中で最も多いものの一つであった」(ブムケ、497)ゆえにグヴィネヴィアがよい存在として描かれているということではできないであろう。こういった描写は、宮廷風恋愛を求め、そのような愛に生きたいと願いながらも、一族のしがらみが、キリスト教的な価値観が、決してそれを許さないという現実で苦悩した当時の若き女性たちの、葛藤を描いているといえるのかもしれない。

結論

アーサー王伝説とは、不確かな物語である。聖ギルダスやニンネウス、ジェフリー・オブ・モンマスといった人物たちがその著書でアーサー王が実在する人物である、と主張する一方で、“Other authorities say, ‘No Arthur ; at least, no proof of any Arthur’”(Churhill, 18)「他の専門家たちは『アーサーは存在しない。少なくとも証拠は存在しない』と主張している」(拙訳)という意見もあるように、いまだ実在したかしないかすら不確かなのである。

それでも、少なくとも中世という時代においては、そのアーサーという人物の物語は確かに存在したのだ。長い時を経て実在の人物の逸話から、神話的な英雄要素を獲得し、中

世という時代において騎士、キリスト教の教え、宮廷風な恋愛といった要素を吸収し、中世に生きた文学者、騎士、吟遊詩人によって、アーサー王伝説は中世において語られたのである。

中世において、騎士とは社会の3つの身分の1つであり、その振る舞いには弱者への慈しみ、貴婦人への献身、そして主君と神への忠節といった要素が求められていた。ところが理想と現実とは異なり、食うに困った騎士や、傭兵騎士によって、村や教会が荒らされることも少なくはなかった。そんな騎士を嘆いた人々が、せめて物語の中には理想的な騎士を描き、夢を見たかったのではないかということは想像に難くない。古い土着宗教の時代から、キリスト教が絶対的だった時代に変化する過程において、物語の人物たちが、キリスト教の敬虔な信徒であり、まさにキリスト教的価値観において善とされる人物であってほしいという願望があったことも否定はできないだろう。そして、女にとって自発的な愛が悪とされ、愛した人と添い遂げることさえできない中、理想的な男性に愛され、また愛したいという願望が、物語の人物に影響を与えたことも間違いないであろう。アーサー王伝説は、中世において読者の願望を吸い取って変化した物語であるのだ。

注目したいのは、物語の登場人物すべてが理想的なふるまいをしたというわけではなく、理想的なふるまいをしても報われるとは限らないということである。この点こそ、まさに人々の夢であるといえると思う。物語の中には、完璧な、どこか非現実的な人間ではなく、悩み苦しみ、時には不幸に、時には幸福になる、生の間人間そのものである。そんな生の間人間が、当時の理想を体現している描写からは、人々がアーサー王伝説を単なる理想の物語としてではなく、現実と理想のはざまの、こうありたいという《夢》を物語に臨んでいたのではないだろうか、考えられる

と思うのである。

参考文献

- ウィンター、J・M・ファン『騎士——その理想と現実——』佐藤牧夫／渡部治雄訳、東京書籍、1982年
- 小豆畑ほか『世界史辞典 三訂版』旺文社、2000年
- キング、エドモンド『中世のイギリス』吉武憲司、ほか訳、慶応義塾大学出版会、2006年
- 小松芳喬『イギリス封建制の成立と崩壊』弘文堂書房、1971年
- 佐藤俊之、F.E.A.R『アーサー王』田口純子画、新紀元社、2002年
- サザーン、R.W.『西欧中世の社会と教会——教会史から中世を読む』上條敏子訳、八坂書房、2007年
- シュタイナー、ルドルフ『聖杯の探求——キリスト教と神霊世界』西川隆範訳、イザラ書房、2006年
- 『聖書 新共同訳』日本聖書教会、1988年
- デュビー、ジョルジュ『中世の結婚——騎士・女性・司祭』篠田勝英訳、新評論、1984年
- ブムケ、ヨアヒム『中世の騎士文化』平尾浩三、ほか訳、白水社、1995年
- マシューズ、ジョン『アーサー王と中世騎士団』本村凌二訳、原書房、2007年
- ル・ゴフ、ジャック『中世の人間——ヨーロッパ人の精神構造と創造力』鎌田博夫訳、法政大学出版局、1999年
- Churchill, Winston. *A History of the English-Speaking Peoples*. Skyhorse Publishing, 2011
- Green, Roger Lancelyn *KING ARTHUR AND HIS KNIGHTS of THE ROUND TABLE* Puffin Books, 1994